

日本語学習者の発音習得に影響を与える要因：中国語を母語とする学習者を対象に

末延，麻子

<https://hdl.handle.net/2324/4475209>

出版情報：九州大学，2020，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	末延 麻子			
論文名	日本語学習者の発音習得に影響を与える要因 —中国語を母語とする学習者を対象に—			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	志水俊広
	副査	九州大学	教授	松永典子
	副査	九州大学	教授	郭俊海
	副査	九州大学	准教授	李相穆
	副査	九州大学	准教授	辻野裕紀

論文審査の結果の要旨

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の発音習得に、学習者の持つ様々な要因がどのように影響を与えているのか、さらにその要因間はどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。言語習得、とくに発音習得においては、学習者間に習得の差が現れやすいと言われており、その差は様々な要因に起因すると考えられている。これまでの日本語の発音習得に関わる要因に関する先行研究では、次のようなことが明らかになっている。発音能力が高い学習者はメタ認知ストラテジーや社会的ストラテジーを使用していること、発音能力が高い学習者は高い目標を持っており発音を向上させようという積極的な意欲があること、日本語学習者の発音に対するピリーフは留学経験の有無や性別によって異なり発音指導を受けることによって変化すること、発音学習ストラテジーの使用は学習環境に影響を受ける可能性があることなどである。日本語の発音習得に関わる要因に関する研究は多いとは言えず、これまでの研究は調査対象者の学習環境や社会文化背景および学習者要因が異なっており、必ずしも結果が一致しているわけではない。発音習得は、学習者を取り巻く環境や学習者の持つ様々な要因の影響を受け、その要因同士も影響し合っているため、どの要因がどの程度影響を与えるのか、要因同士はどのような関係にあるのか、更なる研究の蓄積が求められている。

本研究では、学習者の発音習得度に影響を与える学習者の個人差を構成する要因として、外的学習者要因である「日本語学習年数」、「発音に対する考え方」、「発音学習ストラテジー」、および学習環境要因である「学習機関」、「発音に関する授業の受講経験」、「日本滞在年数」の6つの要因を対象として、次の5つの研究課題を設定した。(1)各要因は、日本語の発音習得度とどのような関係があるのか、(2)各要因はどの程度日本語の発音習得度に影響を与えるのか、(3)発音習得度に最も影響を与える要因は何か、(4)発音に対する考え方に影響を与える要因は何か、(5)発音学習ストラテジーに影響を与える要因は何か。この5つの課題を解明するために、中国語を母語とする日本語学習者46名を対象に、質問紙調査と発音タスク調査を実施し、データを分析した。使用した発音タスクは、中国語母語話者の日本語音声習得に関する先行研究の結果から、中国語母語話者にとって難しいと指摘される日本語音声項目を含め、筆者が作成した。発音タスクは、単語・短文・文章の3つの部分から成る。本研究では、この発音タスクを日本語母語話者が評価した評価点をもって「発音習得度」とした。課題(1)の解明には相関分析、課題(2)の解明には単回帰分析、課題(3)・(4)・(5)の解明には重回帰分析を用いた。さらに、発音習得度により上位群と下位群に分け、比較分析を行った。

課題(1)の相関分析の結果、発音に対する考え方および発音に関する授業の受講経験は、日本語の発音習得度とあまり関係がないことが明らかになった。課題(2)の解明のために行った単回帰分析では、外的学習者要因である「日本語学習年数」と発音学習ストラテジーの下位区分である「意識・修正ストラテジー」や「人的リソースの活用」、および学習環境要因である「学習機関」と「日本滞在年数」の5つの項目が発音習得度に影響を与えていることが明らかになった。課題(3)では、これら5つの項目のうちどの要因が最も発音習得度に影響を与えているか明らかにするために、重回帰分析を行ったところ、単語および短文の発音習得度に最も影響を及ぼしているのは「発音学習ストラテジー」の下位区分である「意識・修正ストラテジー」であり、文章の発音習得度に最も影響を及ぼしているのは、「日本滞在年数」であることが明らかになった。上位・下位群の比較分析では、人的リソースの活用において、上位群の方が日本語母語話者との接触頻度が高く接触場面が多いことが明らかになった。中国における学習機関の上位・下位群の比較分析では、上位群は全員が中国において日本語を専攻しており、日本語学習の初期に継続的なインプットや学習の機会を得ることの重要性が示唆される結果となった。課題(4)においては、発音に関する授業の受講経験が発音に対する考え方に正の影響を及ぼしている一方、課題(5)においては発音に関する授業の受講経験が発音学習ストラテジーに負の影響を及ぼしていた。発音に関する授業の受講経験が正の影響を及ぼしていたのは、「先生がいなくても発音が上達するとは思わない」、「良い発音で話せないと恥ずかしい」という2つの項目で、負の影響を及ぼしていたのは意識・修正ストラテジー頻度だった。このことから、発音に関する授業の受講経験は、発音や音声教育を重要視することに繋がるが、効果的な発音学習ストラテジーの使用には繋がっていない可能性がある。本研究の結果を総合すると、学習初期に教育機関において継続的な日本語学習を行う機会があり、日本語の発音に意識を向けた発音学習を自ら行い、来日後に日本語母語話者と積極的に日本語でコミュニケーションをとる意欲のある学習者は、日本語の発音能力が高くなる可能性が高いと言える。

以上のように、本論文は中国語を母語とする日本語学習者の発音習得に影響を与える要因を明らかにしようとしたものであり、その結果は日本語学習者の発音習得研究に貴重な知見を提供してくれるものとして評価でき、第二言語習得理論および日本語教育の分野において価値ある貢献となるものである。よって、論文調査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するに値すると判断した。